

V. 国際連携

V-1. ICED2010 参加報告

1. ICED2010 について

2010 年 6 月 28 日～30 日、スペインのバルセロナにおいて開催された ICED2010 (The International Consortium for Educational Development) に、本センターの田川千尋特定助教（当時はパリ大学西ナンテール博士後期課程）が参加した。

◇ICED <http://www.osds.uwa.edu.au/iced>

◇ICED2010（大会ウェブサイト）

<https://congresos.ultramarexpressevents.com/congress/en/iced-2010/inicio/>

ICED は、1993 年に設立され、「メンバーネットワークを通じて educational / academic / faculty の発展および新たなネットワーク（複数）を構築することを推進し、世界中の higher&tertiary 教育における T&L の理解・経験を向上させる」ことを目的とした国際学会である。現会長はウエスタン・オーストラリア大学の Shelda Debowski 氏で、23 カ国のネットワークが加盟している。

ICED は今回で 8 回目の開催であり、過去にはドイツ、イギリス、フィンランド、アメリカ、オランダ、スペインで開催されている。ホストは、Universitat Pompeu Fabra がつとめた。

今回の大会への参加者数は 32 カ国より 403 名に及んだ。参加者数の多い国としては、スウェーデン、イギリス、オーストラリア、スペイン、アメリカ、があげられ、英語圏あるいは欧米からの参加が多いが、ブラジル・中国・タイなどこれ以外の地域からの参加も見られた。日本からは、本センターからのほか、大阪大学、愛媛大学、高知大学、佛教大学、弘前大学、帝京大学からの参加があり、関心の高さがうかがえた。

参加者の多くは教授・学習センター組織に所属する教員あるいは職員のものであり、Ph.D. を持つ参加者も多いようである。

2. プログラムの内容および全体の印象

プログラムは、基調講演、口頭発表、ポスターセッション、ワークショップなどで構成

されているが、その6割以上を占める口頭発表の数は166にも達し、10以上のセッションが同時並行で進んでいる。口頭発表は1件につき20分間であるが、各国の事情も説明しつつ本質的な話に入るには少し短いようにも感じられた。

大会テーマは”Enhancing Strategies for Global Quality Learning in Higher Education”と設定されており、高等教育を取り巻く状況が激しく変化する中、どのようにして学生の学習をサポートしていくのかという点について、様々な視点から発表・議論された。この中で、いくつかの大学の Teaching&Learning センターは発表とあわせ複数のワークショップを主催し、大会全体を引っ張っている様子であったのが印象的であった。中でも Cynthia Weston (EdD), Laura Winer (McGill University), Denis Berthiaume (University of Lausanne), Julie Timmermans (McGill University) の行った発表 “Levels of agency in educational development”では、学内から国際までFDの様々なレベルでの連携について本センター松下佳代教授の文献に言及しながら発表が行われ、印象的なセッションとなった。

(田川 千尋)

V-2. ISSOTL2010 参加報告

1. ISSOTL10 について

2010 年 10 月 19 日～22 日、イギリスのリバプールにおいて開催された ISSOTL10 (International Society for the Scholarship of Teaching and Learning) に、本センターの松下佳代教授、酒井博之特定准教授、及川恵特定准教授、田川千尋特定助教の 4 名が参加した。

ISSOTL <http://www.issotl.org/>

ISSOTL10 (大会ウェブサイト) <http://issotl10.indiana.edu/>



写真 1 ISSOTL10 の会場 (Arena & Convention Center Liverpool)

ISSOTL は、カーネギー教育振興財団が提唱してきた “Scholarship of Teaching and Learning (SOTL)” の理念にもとづき個人や組織で取り組まれる高等教育の授業実践や教育改善の活動成果を扱う国際学会である。現会長は、ブリティッシュ・コロンビア大学の Gary Poole 氏で、約 70 名の設立メンバーを中心に運営されている。なお、SOTL は「ソートル」、ISSOTL は「アイエスソートル」と発音する。

ISSOTL は今回で 7 回目の開催であり、北米以外では 2 回目、ヨーロッパで開催されたのは初めてである。ホストは、Oxford Centre for Staff and Learning Development (Oxford Brookes University) がつとめた。

大会初日に、参加登録者は 375 名 (27 カ国) とアナウンスがあったが、昨年インディ

アナ大学ブルーミントン校で開催された際には参加者数が約 650 名であったことを考えると、今回はほぼ半減したことになる。発表の取り消しも目立ち、実際にはこれより少ない参加者数であったように感じた。SOTL 発祥地の米国からすれば海外での開催であることや、世界的不況で教育実践報告に係る旅費の捻出が困難であったことも原因となっているのだろう。

また、発表の中でも SOTL という概念があまり使われず、シュルマン (L. Shulman)、ヒューバー (M. Huber)、ハッチングス (P. Hutchings) といった SOTL の理論的リーダーからの引用が少ないなど、全体に SOTL 色が弱い大会であった。

ISSOTL は、一般の大学教員の参加の割合が高いことが特徴であるが、これは、ファカルティ主導で教育改善プログラムを推進してきたカーネギー財団の諸活動を反映するものである。しかし、教授・学習センターのスタッフも多数参加している。米国、英国、オーストラリアなど英語圏の国からの参加が大半を占めていたが、アジア各国からの参加者も少なくない。日本からは、本センターの 4 名のほか、山形大学 2 名、静岡大学 1 名、名古屋大学 1 名の参加があった。香港大学の徐碧美教授（副学長／語言及教育講座教授）や高麗大学教授学習開発院のハンセンター長、K. Lee 教授とは昼食を共にし、国を超えた交流や情報交換ができたことは今回参加した成果のひとつである。

2. プログラムの内容について

ISSOTL10 の大会プログラムを図 1 に示す。プログラムは、一般的な学会と同様、基調講演、パネルディスカッション、口頭発表、ラウンドテーブル、ポスターセッション、ワークショップなどで構成されている。口頭発表は 1 件につき 30 分間と比較的長く、取り組みの詳細説明やフロアとのディスカッションに十分時間が割けるようになっている。これも ISSOTL の特徴の一つであるが、一般の口頭発表を含む多くのセッションでは、聴衆もその場で突然ペアや小グループを作り議論することが求められることが少なくない。また、参加者には毎日昼食が準備されているが、昼食時にも議論を継続するようにプログラムに意図的に組み込まれているそうである。

大会テーマは “Global theories and local practices: Institutional, disciplinary and cultural variations” と設定されており、オープニングの基調講演や毎日 1 件行われる全体講演のほか、個別の発表でも実践と理論をいかに接続するかを課題とした報告が目立った。以下に、大会の印象に残った講演およびセッションについて紹介する。



写真 2 基調講演の様子

Time of Day	Tuesday 19/10/2010	Wednesday 20/10/2010	Thursday 21/10/2010	Friday 22/10/2010
8.00 - 8.30	Council for Undergraduate Research with the Advancing Undergraduate Research. ISSOTL Special Interest Group. 8.30 - 5.00	Registration for CUR	Breakfast Meetings	Breakfast Meetings
8.30 - 9.00			Concurrent 1 Session D	Plenary Session J Carroll & J Ryan
9.00 - 9.30			Break	Concurrent 7 Session K
9.30 - 10.00		Pre-Conference w/s Registration Opens	Plenary Session Michelle Lamont	Break
10.00 - 10.30			Lunch Membership Meeting	Plenary Session Society Awards
10.30 - 11.00				Closing keynote: R. Land & J.H.F. Meyer
11.00 - 11.30				Lunch by own arrangement
11.30 - 12.00				
12.00 - 12.30				
12.30 - 1.00				
1.00 - 1.30		General Registration opens 13.30. Familiarisation tour of Liverpool 13.30 - 15.30	Concurrent 2 Session E	
1.30 - 2.00			Break	
2.00 - 2.30			Concurrent 3 Session F	
2.30 - 3.00				
3.00 - 3.30				
3.30 - 4.00				
4.00 - 4.30				
4.30 - 5.00				
5.00 - 5.30				
5.30 - 6.00				
6.00 - 6.30	Opening Keynote - Graham Gibbs	Posters and Reception	Featured Roundtable Session J	
6.30 - 7.00			Free Time	
7.00 - 7.30	Optional Walking tour of Liverpool		Conference Dinner at ACC, Including Lifetime Achievement Recognition for Prof. Lewis Elton and entertainment by the Fab Beaties.	
7.30 - 8.00		Dinner by own arrangement		
8.00 - 8.30				
8.30 - 9.00				
9.00 - 9.30	Dinner by own arrangement			
9.30 - 10.00				

図 1 ISSOTL10 プログラム (大会プログラムより)

2 - 1. 基調講演

「The importance of context in understanding teaching and learning: Reflections on thirty five years of pedagogic research」(Graham Gibbs 教授・University of Winchester)

大会初日の基調講演は、元オックスフォード大学の Graham Gibbs 教授によるものであった。彼自身の 35 年間の教育研究について振り返った内容で、教授・学習を理解するに

あたり、研究で得られた知見の適用範囲に他者がより自覚的になるように文脈情報をより多く提供することや、理論を実践に適用する際に多様な文脈を留意することの重要性を問うものであった。

2-2. 全体講演（10月20日）

「Venturing into strange places: Preparing graduates for the 21st century」(Ray Land 教授・University of Strathclyde)

2 日目の全体講演は、予定された講演者がフライトの問題で来られなかったため、Ray Land 教授の講演に変更された。Land 教授は、threshold concept(閾の概念)と troublesome knowledge (獲得困難な知識)の概念の提唱者として知られている。threshold concept とは、ある学問世界の入口で学ぶ概念、それを学ぶことによって学問世界につながり、新しい見方や思考ができるようになる概念のことである。それは、学ぶのが困難な troublesome knowledge でもある。ISSOTL ではこれまで何度か耳にしたことのあるタームだ。

ただし、このテーマに関する Land 教授の講演は最終日に予定されていたので、この日の講演はそれとは異なるテーマであった(これらのタームへの言及はあったが)。

講演は、「21 世紀社会の特徴は何か?」「21 世紀社会を生き抜いていくために必要な高次の学生属性は何か?」「そのような属性を育むためにどんな種類の学習環境や教授アプローチが最も適切か?」という問いに答えていく形で進められた。21 世紀社会の特徴として、彼は、unknowable world、supercomplexity、risk、intellectual uncertainty、pedagogies of uncertaintyなどをあげ、こうした特徴は研究の中にこそ見られるものだとして、「教育と研究は、かつてないほどに内的な関連性を高めつつある」とフンボルト理念の復興を提起した。

ユニバーサル化した大学の実態から入りながら、最後はやや理念先行になった感は否めなかったが、フンボルト理念が英国でもまだこんな形で取り上げられるというのは興味深かった。

2-3. 全体講演（10月21日）

「Learning across cultures: Opening our minds as well as our doors」(Jude Carroll・Oxford Brookes University and Janette Ryan 博士・Monash University)

この全体講演は、異文化における教育がテーマであり、はじめに西欧教育と儒教教育の対比(e.g., critical thinking/follow the master, independent learning/dependence on the teacher, student-centered learning/respect for the teacher, etc.)を行う中で、このような対比が主に西欧の教員による記述であり、彼らの価値観や基準を反映したものであることを指摘していた。International students の教育を考える際、他の学術的・文化的実践について認識し、価値を置くことの重要性やステレオタイプの問題点、文化の多様性や社会的背景(e.g., 中国の過去 5~10 年の教育の変化、両親の高い期待、激しい競争など)を考慮する重要性などを指摘し、ライティングを題材としながら異文化間の教育を行うための観点を提示する内容であった。

2-4. 印象に残ったセッションなど

(a) Optimizing eLearning support framework to engage students and teachers

Cecilia Chan, Michael T Prosser (The University of Hong Kong)

ICT関係の発表では、過去に米国やカナダで参加した際の発表と比較すると、欧州での開催であるためか、個別の授業実践に対するICTの適用に関する報告よりICT導入における組織的戦略や運営組織のあり方などの報告が目立つように感じた。例えば、M. Prosser 教授（香港大学）の報告では、高等教育機関におけるeラーニングの最適な支援枠組みを、香港の41大学に対する調査（ウェブ、メール、インタビュー、文献）の結果から提案していた。調査対象は、教員、Policy maker、IT担当者であった。報告後の議論では、学内で教授学習支援組織とテクノロジー支援組織の間に緊張関係があり、その協力や分担の体制作りなどの課題についてフロアと意見交換がなされた。日本でも同様に両組織間の協働にあたっての緊張関係が課題の一つとなっており、この解決に向けた示唆的な内容であった。

(b) Student-created podcasts to support transition in higher education

C. Cane et al. (University of Leicester), R. Cane (University of Oxford)

ここでいうトランジションとは、高校から大学への移行である。学生生活へのトランジションにつまずいている学生に対し、podcast を使って、同じ問題に悩んだことのある先輩や仲間がメンタリングを行う（「非同期メンタリング」）という試みの紹介であった。レスター大学では、StartingUni というプロジェクトを立ち上げているらしい（<http://www.le.ac.uk/beyonddistance/startinguni/impala4t.html>）。レスターやオックスフォードといった研究大学のこのような取組は、京大での学生支援のあり方を考えるうえで参考になるかもしれない。

(c) Engaging students in their space-designing and managing social learning spaces to enhance student engagement

Kelly Matthews (The University of Queensland)

この発表は、授業以外で学生が集まり、作業することのできる、学生同士で相互作用するスペース（Social Learning Space : SLS）の重要性を指摘し、その利用が学生の経験に与える影響を検討しようとする内容であった。発表では、SLSでの学生の様子を撮影したビデオも提示され、時間の経過に伴う学生同士の相互作用を見ることができた。発表では、SLSをよく利用する学生とそうでない学生の比較を行い、学生生活の差異について検討を行っていた。本発表に関連する研究内容については、以下のURL（http://www.fyhe.com.au/past_papers/papers09/content/pdf/3A.pdf）が参考になると思われる。

3. 京大からの発表について

今回、京都大学からは、松下、酒井、及川の3名が発表をおこなった。以下に各発表について述べる（それぞれの発表資料は本項の資料を参照のこと）。

3-1. 松下報告（資料1）

藍野大学の平山朋子さんとの共同研究の成果について、「An investigation into voluntary faculty development practice in physical therapy education: With OSCE-Reflection Method as a turning point」というタイトルの口頭発表をおこなった。藍野大学医療保健学部理学療法学科は、関西FDパイロット校になっており、その実践はMOST上でも公開されている。この発表は、実践のキーとなっているOSCEリフレクション法について、その内容や開発の経過、それがもたらした学生の変化、自生的なFDの展開について、量的・質的データをもとに議論したものである。

質疑応答では、FDの展開を量的な面での拡大だけでなく質的な面での深化についても示すべきではないか（スライドNo.24に関して）、コアメンバーだけでなくマージナルなメンバーの声もあるとよい、といったアドバイスを得ることができた。ポスター発表を見ていたときに、*Introduction to rubrics* (Stylus, 2004)の著者であるポートランド州立大学のDannelle Stevens教授から、「thoughtfulな発表だった」と声をかけられたのも嬉しい出来事だった（この本は、高等教育におけるルーブリックの入門書であり、偶然にも昨年のISSOTLで購入したものだった。近く邦訳が出るらしい）。

3-2. 酒井報告（資料2）

「Building a technology-enabled network for sharing practical knowledge of faculty development across institutions」というタイトルで、ICTを活用した組織的FDのネットワーク構築の試みに関する内容でポスター発表をおこない、発表内容に興味を持って頂いた方々と意見交換ができた。具体的には、関西地区FD連絡協議会で2010年4月に実施した「FD活動の報告会」に対し、本センターが提供するオンラインFD支援システム「MOST」をどのように活用したかという内容であった。「FDや教育改善を大学間連携で互いに高め合う試みはよいことだが、競争的環境は影響しないのか」といった質問があったが、「競争」と「協同」をいかに調停していくかはまさに本実践の今後の課題である。

ポスター発表数は全体で21件とやや寂しかったが、ポスターセッションはレセプションと同時にこなわれ、発表者を含めて参加者が飲み物を片手に和やかに議論する光景が見られた。

3-3. 及川報告（資料3）

京都大学工学部の卒業時学生実態調査のデータに基づき、学生生活の活動と学部教育を通して獲得したと思う知識・スキル、現在の心理的適応感の関連について、ポスター発表（共同発表）を行った。発表タイトルは「The relationships between student activity, school results, and psychological adaptation」であった。

本発表では、学生生活について、学習活動（授業）、学習活動（対人）、課外活動の3つに分けて検討した。共分散構造分析の結果、各活動を行った程度の高い者ほど知識・スキルが身についたと評価していること、知識・スキルが高いほど適応感が高いことが示唆された。また、学習活動（対人）、課外活動は共に適応感に正の影響があり、こうした対人的活動は大学における適応感を考える上で重要であることが示唆された。

ポスターセッションでは、日本の大学に関心を持つ研究者や、9月末に韓国の大学訪問をした際に訪れた高麗大学の教授学習開発院のハンセンター長らと偶然に顔を合わせ、交流を深めることができた。

4. まとめ

来年の ISSOTL11 は 2011 年 10 月 20 日～23 日に米国ウィスコンシン州のミルウォーキーで開催されることが決定している。すでに、P. Hutchings、M. Huber、T. Ciccone、D. Bernstein といったカーネギー財団の SOTL プロジェクトを牽引してきたキーパーソンの基調講演も決まっている。次年度も本センターから数名が参加し、成果報告と情報収集をおこなう予定である。

ISSOTL11（大会ウェブサイト） <http://issotl11.indiana.edu/>

（酒井博之、松下佳代、及川恵）

ISSOTL 2010
October 19-22, 2010 @Liverpool



**An investigation into
voluntary faculty development practice
in physical therapy education:**

With OSCE-Reflection Method as a turning point

Kayo MATSUSHITA Center for the Promotion of Excellence in Higher Education Kyoto University, Japan	Tomoko HIRAYAMA Faculty of Nursing and Rehabilitation Aino University, Japan
---	---

Our center



- Kyoto University
 - Large research university
- Our Center
 - First center for T&L in Japan (since 1994)
 - Mission: R&D in HE inter-college institute




2

CONTENTS



- Background and Purpose
- Development of OSCE-R
- Changes in Student Learning
- Emergence of Voluntary Faculty Development

3

1. Background and Purpose



4

1.1 Faculty development in Japan



- Concept
 - Ambiguous concept including both professional development and educational development
- Diffusion under the Ministry of Education
 - Since 1990s
 - Legislation
 - "Universities are to implement organizational training and research intended to improve the content and methods of their teaching." (The Standards for the Establishment of Universities, 2007)

5

1.2 Challenge



- Diffusion but ...
 - Common image of "FD": obligatory, irrelevant, useless
- Challenge
 - How can we make faculty development substantial and effective?

6

1.3 This study

- Exceptional practice at Aino University
 - Voluntary, faculty-driven
 - Successful in fostering deep student learning



- Purpose
 - To examine what has brought about this faculty development practice and how

7

2. Development of OSCE-R

8

2.1 Physical Therapy Curriculum

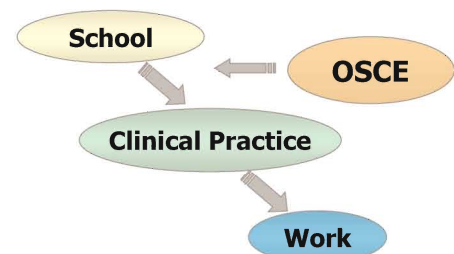
	Disciplines	Clinical practice
4th year		Total clinical practice
3rd year	Therapeutic Exercises, Physiotherapy, etc.	Evaluation training
2nd year	Kinesiology, Neurology, Orthopedic Surgery, etc.	Trial
1st year	Anatomy, Physiology, Psychology, etc.	Observation

- Clinical practice
 - 820 hours / 2,800-3,000 total course hours

9

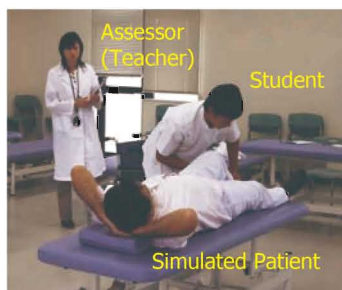
2.2 What is OSCE?

- OSCE = Objective Structured Clinical Examination
 - Summative evaluation of students' basic clinical competence before clinical practice (Harden, 1975)



10

- OSCE
 - A kind of authentic performance assessment



Video

11

2.3 Development of OSCE

- OSCE in Japan
 - Medical & Dental education: standardized testing
 - Physical therapy education: not yet generally implemented
- Development of OSCE
(Physical Therapy version [PT ver.])

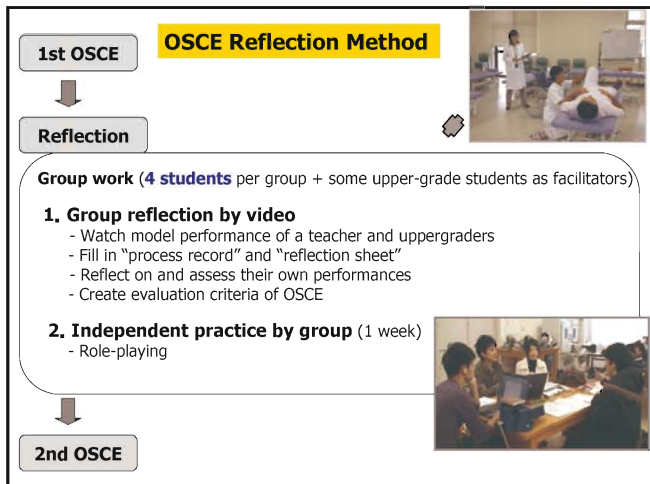
12

Task	Criteria (Checklist type)																								
[Patient's Name] () Age: 22 female/male Currently a fourth year student at university [Name of disorder] right femoral amputation (due to car accident about 2 months ago) You are in a rehabilitation room at the hospital. You have been here for clinical practice for 1 week. You were instructed to conduct medical interview with this patient by the supervisor. At the interview, your task is to talk about patient's concerns. *Time limitation is 6 minutes. [partly extracted]	<table border="1"> <thead> <tr> <th>Medical Interview</th> <th>good (1)</th> <th>bad (0)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>Eye contact while communicating</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Appropriate face direction</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Appropriate volume, speed, and tone of voice.</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Careful choice of words</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Did not interrupt the patient's words</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Communicate in understandable terms</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> <tr> <td>Well composed questions</td> <td>☐</td> <td>☐</td> </tr> </tbody> </table>	Medical Interview	good (1)	bad (0)	Eye contact while communicating	☐	☐	Appropriate face direction	☐	☐	Appropriate volume, speed, and tone of voice.	☐	☐	Careful choice of words	☐	☐	Did not interrupt the patient's words	☐	☐	Communicate in understandable terms	☐	☐	Well composed questions	☐	☐
Medical Interview	good (1)	bad (0)																							
Eye contact while communicating	☐	☐																							
Appropriate face direction	☐	☐																							
Appropriate volume, speed, and tone of voice.	☐	☐																							
Careful choice of words	☐	☐																							
Did not interrupt the patient's words	☐	☐																							
Communicate in understandable terms	☐	☐																							
Well composed questions	☐	☐																							

2.4 From OSCE to OSCE-R

- Development process (2006-)
 - Developed OSCE (PT ver.)
 - Implemented it to 15 students
 - Made the 3 students reflect their performances by video
 - They began to learn spontaneously and made a remarkable progress
 - Formulated this method and named it "OSCE-Reflection Method (OSCE-R)"
 - Kept revising it

14

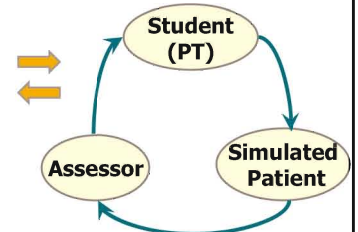


2.5 Learning through OSCE-R

Group reflection by video



Practice by role-playing



16

3. Changes in Student Learning

17

3.1 Research question & data collection

- Question
 - What changes has OSCE-R brought about in student learning?
- Data Collection
 - OSCE scores (1st & 2nd)
 - Questionnaire after OSCE-R
 - Interview after OSCE-R

18

3.2 Results: OSCE score

- Score (out of 25 points)

	1st OSCE	2nd OSCE
3rd-yrs (2007)	8.9	20.0

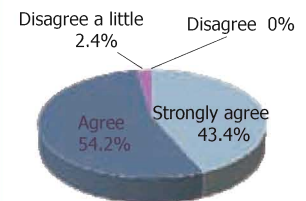
(n=96, t=27.45, p<.01)

19

3.3 Results: Questionnaire

(n=96, partly extracted)

- Q5. Viewing the video of your performance in OSCE was useful to reflection.
- Q11. The OSCE-R has changed your attitude about your learning.



20

3.4 Results: Interview

(n=16, random, partly extracted)

- Becoming aware of patient-centered perspective**
 - "I thought it was necessary to consider what I should do from the patient's standpoint."
 - "My stance has changed from being an 'examiner' to more like being an actual 'physical therapist'."
- Realizing inter-subject connection**
 - "I had learned the content at each course separately. But, from a patient's perspective, all the knowledge needs to be connected together. I want to learn so that I can do it."
 - "I've come to acquire the knowledge about disorder, not by just memorizing it, but by imagining a patient's pain during his motion."

21

3.5 Discussion: Student learning through OSCE-R

- Student learning
 - Deep & extensive learning
 - Assessment with focus on performance
 - What have students learned through OSCE-R?
 - First steps to *being* a physical therapist with a focus on patient's viewpoint
 - Reconstruction of how they should *know* and *act*
- cf. "Integration of knowing, acting, and being"
(Dall'Alba & Barnacle, 2007)

22

4. Emergence of Voluntary Faculty Development

23

4.1 Changes in faculty members

Date	Activity	Students	Participants	Changes in faculty members
8/2006	OSCE	3rd-yrs 15	2	The effect of reflection after OSCE was recognized.
3/2007	OSCE-R	3rd-yrs 7	2	OSCE-R was formulated and first tried informally.
4-5/2007	OSCE-R	4th-yrs 33	7	OSCE-R was organized by more teachers.
8/2007	OSCE-R	3rd-yrs 96	11	OSCE-R was implemented to all the 3rd-yrs and its effect was recognized. However, doubts about it persisted.
9/2007	Clinical practice	3rd-yrs 95		With high evaluation of students by hospital staff, doubts about OSCE-R were wiped away.
10/2007	OSCE-R Café		10-14	Informal meeting to discuss OSCE-R, teaching contents, inter-subject collaboration and curricula has started.

24



- Toohey, S. (1999). Assessing technical/conventional knowledge in nursing. *Designing courses for higher education* (pp. 173-175). SRHE and Open University Press.
- Wieman, C. (2007). Why not try a scientific approach to science education? *Change. September/October 2007*. The Carnegie Foundation of the Advancement of Teaching. (<http://www.carnegiefoundation.org/change/>)
- Wiggins, G. P. (1993). *Assessing student performance: Exploring the purpose and limits of testing*. Jossey-Bass.



Building a Technology-enabled Network for Sharing Practical Knowledge of Faculty Development across Institutions

Hiroyuki Sakai

Kyoto University, Japan

sakai@z04.mbox.media.kyoto-u.ac.jp



Summary

An online university teacher training system consisting of learning management and multimedia portfolio tools was launched in order to support inter-disciplinary and inter-institutional faculty development (FD) activities in higher education in Japan. The system aims to share and connect diverse practical knowledge at individual, communal, and institutional levels as community resources. In this presentation, how educators can incorporate this online system into their daily educational activities and interact with their colleagues who are involved in creating teacher communities and connecting their practical knowledge beyond institutions is discussed.

Background

FD mandatory under university establishment standards (since 2008)

More and more universities began implementing FD
Problem: Activities often lack in substance

Joint Educational Development Center System (since 2010)

"Mutual Faculty Development Core" at Kyoto University
Building FD networks based on the concept of "mutuality"

Goals: Building the core in FD at 4 levels



Technology-enabled FD

The purpose of "Online FD" project is to provide an online environment through ICT for university teachers in Japan in order to support and advance mutual FD activities.

Building a network of learning communities online

MOST (Mutual Online System for Teaching & Learning)

An online space to support and advance FD activities
Built on the Japanese version of KEEP Toolkit 2.5 and Sakai 2.5.4

243 users
50 communities
707 snapshots
(Sep. 2010)

Target user

- Any university teacher, administrative staff, and graduate students (for PFFP)
- Membership is by invitation only

Learning communities in MOST

- Registered members can freely create communities for their own purposes

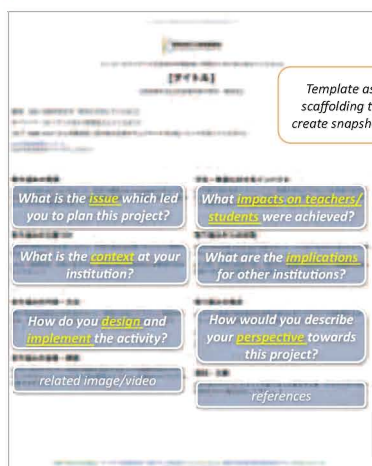
MOST



Example of a snapshot
(by Aino University)



Template



Template as scaffolding to create snapshots

Multiple roles of snapshot

- as a means to solicit comment from institutions
- as a poster
- as an online public snapshot
- as a shared product of practical knowledge

Poster session & Peer review of FD at regional level

Kansai FD Association (since 2008)

- 130 affiliated institutions
- Mutual aid association for FD activities at each institution

Poster session & Peer review of FD (Apr. 2010)

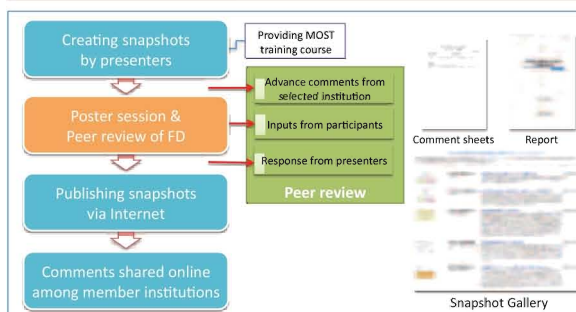
- Exchanging information on the current situation and issues related to the implementation of FD activities at each affiliated institution
- Peer review among affiliated institution



Presentations by 17 universities of different scales, nature and types of students

Diverse theme: Introduction of T&L center, Online syllabus system, Student evaluation, Training program for new faculty members, FD with student participation, Collaboration among departments, Curriculum development, Career development program, Assessment of teachers, Building learning communities, Consultation on class improvement, ICT usage

Design of the activity



Results

Degree of satisfaction

4.26 (57 responses, on a 1-5 scale)

N. of comments

Selected institutions for advance comments: 19

Participants: 19 Presenters (response): 9

Open comments:

- "It would be better to have poster presentations from all members."
- "I suggest that presentations be categorized so that I can choose to browse presentations I am interested in."
- "I will read the snapshots in detail when they are published online later."
- "I wish I had participated as a presenter."

Remaining issues

Improving template design and the program structure

Did the "Perspective" box in the template encourage comments and effective interactions among participants?

Peer review of FD activities

Is the peer review program effective in supporting or improving FD activities at each institution?

- More experience in FD needed in order to improve the quality of comments or discussion.
 - However, the peer review system shows promise of being an effective quality assurance mechanism for FD activities at member institutions.
- It is difficult to match each presentation with a suitable institution for review.

The relationships between student activity, school results, and psychological adaptation

Megumi Oikawa¹, Ayako Ogawa², Yusaku Otsuka¹, Hiroyuki Ishikawa¹

¹ Center for the Promotion of Excellence in Higher Education, Kyoto University, ² Graduate School of Education, Kyoto University

Abstract

We investigated the relationships between student activities, skill and knowledge, and psychological adaptation in Faculty of Engineering, Kyoto University. The majority of participants were the graduating students. The results of the questionnaire suggested that student activities enhanced their skills and knowledge and psychological adaptation.

Purpose

Faculty of Engineering is the largest faculty in Kyoto University, Japan. The faculty and our center have been working together on improving their education.

Our center had been providing the accumulation of data through class evaluation for about four years. Moreover, the need for investigating the actual conditions among the students has become more urgent.

The purpose of this study was to investigate how undergraduates had spent their school life and what they had learned as a result of the university's education with implications for enhancing educational development.

Method

Participants were 682 Japanese undergraduates (male=632, female=50. 22.44±0.94 years).

The majority of participants were senior students of the faculty. Participants reflected upon and evaluated their experience in Kyoto University.

The questionnaire consisted of (1) student activity, (2) skill and knowledge, (3) psychological adaptation to the university, etc.

- Student activity** was assessed by asking the extent to which they got involved and used their time for various activities (e.g., "I joined actively my department's or laboratory's events", "I had a lot of time to engage in my club activity", etc.).
- Skill and knowledge** was assessed by asking the extent to which they mastered various skills and knowledge through the education in Faculty of Engineering.
- Psychological adaptation** was assessed by asking the extent to which they felt that there was a good atmosphere in the university (Okubo & Aoyanagi, 2003) (e.g., "I can empathize with people around me", "I can show my real character in campus", etc.).

All answers were rated on the scale from 1 (disagree) to 4 (agree).

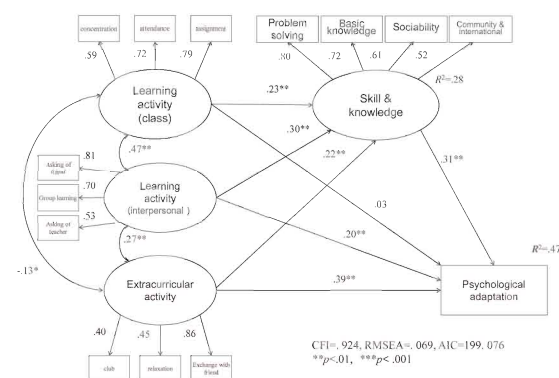


Figure1. The causal model about student activity, skill and knowledge, psychological adaptation

Results

As a result of factor analysis for skill and knowledge, 4 factors were extracted.

1. problem-solving (7 items)
e.g., skill of discovering problem for myself
 2. professional basic knowledge (5 items)
e.g., broad basic knowledge and skill
 3. sociability & cooperativeness (4 items)
e.g., skill of behaving and living with managing myself
 4. regional & international exchange (3 items)
e.g., skill of promoting international exchange
- Based on the result, we made 4 scales about skill and knowledge.

Figure 1 shows that all student activities enhanced their skills and knowledge, and that especially interpersonal learning activities and extracurricular activities enhanced psychological adaptation.

Moreover, their skills and knowledge also enhanced psychological adaptation.

Discussion

The results suggested that not only learning activities in standard class but also interpersonal learning activities and extracurricular activities played an important role in order to enhance their skill and knowledge. Interpersonal learning activities and extracurricular activities have something in common with interpersonal relationship, which may be useful to enhance psychological adaptation.

Increasing skill and knowledge may promote their self-efficacy, and it may lead to psychological adaptation.

It is essential that we investigate the factors on students' performance comprehensively.

In the future research, we should investigate other factors (e.g., goal, motivation, personality) which promote various student activities. Also, it is necessary to conduct a multifaceted study of the results of the university's education based on a qualitative data adding to a quantitative data.

V－3．韓国の大学におけるFDの実践状況と その評価のあり方に関する調査

1．目的および日程

1－1．目的

- ・隣国韓国の主要大学の大学教育センターを訪問し、FDに関わる実践の状況とその評価のあり方について調査するとともに、当該分野における国際相互交流を図る。

1－2．訪問者

- ・大塚 雄作（京都大学高等教育研究開発推進センター・教授）
- ・及川 恵（京都大学高等教育研究開発推進センター・特定准教授）
- ・石川 裕之（京都大学高等教育研究開発推進センター・特定助教）

1－3．日程および訪問先

日程	出発地	到着地	訪問先
平成22年 9月28日 (火)	関西国際空港 (大阪)	金浦国際空港 (ソウル)	梨花女子大学教授学習開発院 (Institute for Teaching and Learning)
9月29日 (水)	滞在		国立ソウル大学教授学習開発センター (Center for Teaching and Learning) 同 大学生生活文化院学生相談センター
9月30日 (木)	滞在		ソウル女子大学教授・学習研究院 (Institute for Teaching and Learning)
10月1日 (金)	金浦国際空港 (大阪)	関西国際空港 (ソウル)	高麗大学教授学習開発院 (Center for Teaching and Learning)

- ・本報告では日本でまだあまり紹介されていない梨花女子大学教授学習開発院、ソウル女子大学教授・学習研究院、高麗大学教授学習開発院の取り組みについて紹介することとし、国立ソウル大学教授学習開発センターの取り組みについては稿を改めて紹介したい。

写真：国立ソウル大学教授学習開発センターの先生方と



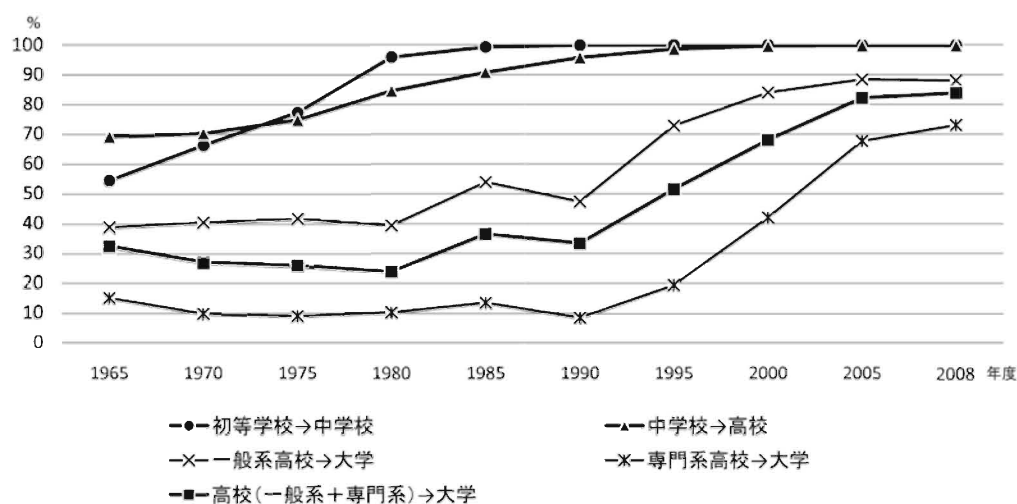


図2. 各教育段階から上級学校への進学率の推移

出所：韓国教育開発院教育計画研究室編『韓国の教育指標1986』韓国教育開発院、1986年、教育人的資源統計サービス、<http://cesi.kedire.kr/>、2009年10月12日アクセスをもとに作成。

表1. 高等教育機関の現況（2008年時点）

（カッコ内は私立学校の占める割合）

	一般大学	教育大学	専門大学	放送通信大学	産業大学	技術大学	遠隔大学	社内大学	各種学校	合計
学校数	174	10	147	1	13	1	17	2	3	368
(私立)	(85.6%)	(0.0%)	(93.2%)	(0.0%)	(61.5%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(86.1%)
学生数	1,943,437	24,116	771,854	272,550	161,876	171	85,984	165	1,279	3,261,432
(私立)	(78.8%)	(0.0%)	(96.5%)	(0.0%)	(49.7%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(100.0%)	(75.0%)

出所：教育科学技術部、韓国教育開発院『教育統計年報2008』韓国教育開発院、2008年、592～593頁をもとに作成。

注：大学院は含まない。

2-2. 大学教育システム

- ・原則として単位制（韓国語では「学点制」）を敷いている。1単位あたりの履修時間は毎学期15時間以上とのみ定められており（高等教育法施行令第14条）、日本のように自習に関する規定はない。大学や授業ごとに異なるが、学期ごとに15週の授業があり、1週間に75分の授業を2回実施して3単位与える場合が多いという。
- ・多くの大学がGPA制度を導入している。
- ・日本と比べると大学生は概して勉強熱心であり、授業への出席率も高いといわれる。
- ・テニユア制を採っている大学が多い。通常、専任講師で2年、助教授で4年、副教授で5年過ごし、教授昇進の条件を満たし審査委員会に通過すればテニユアを与えられるという。

3. 梨花女子大学教授学習開発院

3-1. 出席者（訪問者除く）

- ・イ・ジョンギョン（教授学習開発院 院長／社会生活学科歴史専攻 教授）
- ・キム・ヨンフィ（教授学習開発院 学習支援・コンサルティング担当）
- ・ユン・ジョンア（亜州大学校教授学習支援センター 研究教授）



3-2. センターの概要

①沿革

1969年：視聴覚教育院設立

1998年：マルチメディア教育院に改編

2008年：教授学習開発院設立

②組織および人員

- ・センターは教務処の下部組織（総長－教務処－教授学習開発院）。

Ex)学生相談センターは学生処の下部組織となっている。

- ・教授学習支援（教授支援3名、学習支援3名）、eラーニング支援（運営2名、企画・開発2名、デザイン2名）、マルチメディア技術支援（撮影・技術支援6名）の3部門で構成されている。
- ・スタッフは計18名。
- ・院長は2年の任期制で学部から来る（現在の院長は西洋史が専門）。院長以外のスタッフは専任であるが、授業も担当している。

3-3. プログラム

①教授支援プログラム

- ・講義力向上のための教授法セミナー、講義資料制作ワークショップ、グローバル・オンライン英語講義教授戦略プログラム、教授力量涵養のためのコーチングプログラム、教授法関連情報支援 など

②学習支援プログラム

- ・学部生、大学院生を対象として提供している。
- ・学習コンサルティングおよび学習戦略ワークショップ、チュータリング・プログラム、英語講義学

習戦略ワークショップ、ITスキルアッププログラム、大学院生のための研究方法論セミナー、コミュニケーション能力コーチングプログラム など

- ・成績が非常に悪くドロップアウトの危機にある「学事警告生」のための学習コンサルティングもおこなっている。メンタル面に関しては学生相談センターと連携。

③eラーニング・プログラム

- ・梨花サイバーキャンパス（大学内正規科目eクラス）、梨花グローバルオンラインキャンパス（海外大学単位交流オンライン英語講義）、開かれたeラーニング課程（大学内非正規課程） など

4. ソウル女子大学教授・学習研究院

4-1. 出席者（訪問者除く）

- ・パク・スンホ（教授・学習研究院 院長／教務処 処長／教育心理学科 教授
／大学教育開発センター協議会 会長）
- ・ソ・ユンギョン（教授・学習研究員 教授－学習支援室教授法支援部 部長／教育大学院 専任講師）
- ・キム・ウンヨン（教授・学習研究員 ラーニングスキル担当／教育大学院 専任講師）
- ・ハ・ギョンス（教授・学習研究員 マルチメディア担当）



4-2. センターの概要

①沿革

- ・ミシガン大学の教授学習センターをモデルに2003年に設立された。

②組織および人員

- ・以前は教務処の下部組織であったが、2007年に総長直属の機関となった。現在の院長は教務処長も兼任しており、145大学の大学教育センターによって構成される全国的な連合組織である大学教育開発センター協議会の会長でもある。
- ・名称を「開発センター」ではなく「研究院 (institute)」としているのは、同センターが教授学習に関わる研究機能を担っていることを示すため。
- ・院長直属の創造性教育支援センター（研究員2名）、教授開発研究部（教員1名、修士課程の研究

名、研究員1名)、マルチメディア制作および行政支援部(職員が6名)の1センター4部門から構成されている。

- ・スタッフは計16名(院長1名、教員3名、研究員6名、職員6名)。
- ・院長は2年の任期制で学部から来る(現在の院長は教育心理学が専門)。院長以外のスタッフは任期なしのフルタイム。

4-3. 支援プログラム

①教授支援プログラム

- ・多人数対象プログラム、小集団対象プログラム、個人対象プログラムのように規模別でプログラムを提供している。
- ・個人別プログラムのうち講義撮影・分析プログラムは3年前から新任者に対する義務となっている。
- ・個人別プログラムのうちピアレビュー・プログラムは教員同士が自発的におこなっており、参加者数は増えている。副教授以上がメンター、それ以下の教員がメンティーとなる。

②学習支援プログラム

- ・多人数対象プログラム(学習法特別講義、学習法フェスティバルなど)、小集団対象プログラム(学習法ワークショップ、スタディーグループ、チュータリング・プログラムなど)、個人対象プログラム(学習相談など)のように規模別でプログラムを提供している。
- ・新入生、学事警告学生、編入生、文転・理転生などのマイノリティ学生のニーズと対応を把握するために学生支援調査を実施中。

③サービス・ラーニング

- ・教養・専攻科目に地域社会への奉仕を統合した教授・学習法。2005年から正規プログラムに。2009年には28科目開講し、200～300名の学生が参加。
- ・サービス・ラーニングに参加すると科目単位にプラスして1単位が出る。
Ex)「学習戦略」という授業を受け、そこで学んだ学習戦略を、勉強があまり得意でない友達に対して実際に使ってみる。さらに、それについてレポートを書き、教員に提出してチェック&フィードバックをもらう。15名程度の小集団でおこない、学期ごとに評価会も開く。
- ・サービス・ラーニング科目を開講する教員に対しては、プログラム運営費やアシスタントの活動費などを支援している。

5. 高麗大学教授学習開発院

5-1. 出席者

- ・ハン・ドゥボン(教授学習開発院 院長/食品資源経済学科 教授)
- ・チョ・ソンフィ(教授学習開発院 研究員)



5-2. センターの概要

- ・グローバル社会で活躍できる人材を育成し、高麗大学を世界トップレベルの大学に発展させるべく2003年に設立された。教務部副総長直属の機関（総長－教務部副総長－教授学習開発院）。
- ・教育支援部門、学生支援部門、eラーニング部門の3部門にから構成されている。
- ・スタッフは計21名。内訳は、院長1名、研究教授3名（外国人か、もしくはネイティブレベルの英語力を持つ韓国人）、研究員が4名（教授法担当1名、学習法担当1名、eラーニング担当2名（技術スキル1名、OCW担当者1名）で、全員が修士号を持つ）、事務職員3名、修士課程在学中の助教（アシスタント）10名。

5-3. 支援プログラム

①教員評価への対応

- ・高麗大学では2003年から、新任教員は1学期2科目以上英語で授業をおこなうことが義務づけられている。
- ・新任教員研修を学期ごとに2日間実施している。新任教員は着任後3年経過すると、研究と教育について評価を受けなければならない。
- ・着任3年目や昇進時の教育に関する評価は教授学習開発院がティーチング・ポートフォリオを用いておこなう。ただし、昇進等の決定権を有するのは、各学部や教務処であり、教授学習開発院の付けた評価は人事を決定する際の資料とされるにとどまる。
- ・学生による授業評価も教員評価に活用されている。学生は授業評価アンケートに答えないと自分の成績をもらえないため、100%の学生が授業評価アンケートに答える。
- ・昇進時には授業評価が重要な要因になってくるので、授業評価が悪いと教員はかなりストレスを受けるし、教員は授業評価に神経を注いでいる。高麗大学では下位10%の授業評価を受けた教員に対しては、学部長から「もっと頑張れ」と警告がいく。このため、教員の都合による休講が少なくなった。

②教授法研究コミュニティ（FLCs）

- ・ファカルティが4名以上集まってコミュニティを作り、授業改善のための方法を模索する。教員の組み合わせ（専門）は自由。現在31グループ、150名ほどが参加しており、合計7,000～8,000万ウォンのインセンティブを与えている。

- ・申請は教員が自発的におこない、書類審査がある。

6. 得られた知見

6-1. ティーチング・サポートとラーニング・サポートが不可分のミッションとされている

- ・大学教育センターがどの範囲までを自らの業務とするかは難しいところであるが、少なくとも韓国のセンターではティーチング・サポートとラーニング・サポートは車の両輪のように不可分のものとして考えられている。一方で、生活やメンタル面に関するサポートは学生相談センターなどに任せており、きっちりと線引きしている。学生相談センターとの連携によって、学習面と生活・メンタル面をトータルにサポートするシステムができている。

6-2. グローバル・インパクトの影響

- ・韓国の教員評価システムはアメリカの強い影響を受けており、教育業績が重要視されるようになってきている。
 - ティーチング・サポートに対するニーズ増加
- ・多くの大学がGPA制度を採っており、英語講義を積極的に取り入れるなどグローバル化（雇用、留学）に対応できる教育システムの構築を目指している。
 - ラーニング・サポートに対するニーズ増加
- ・大学の大衆化、学生の多様化といった国内的な要因だけでなく、大学システム（総長の強いリーダーシップ、教育業績重視の教員評価システム、GPA制度などの教育評価システム、英語を重視したカリキュラム等）に対するグローバル・インパクト（アメリカ化）が、ティーチング・サポートやラーニング・サポートのあり方、ひいては大学教育センターのあり方にも大きな影響を及ぼしていると考えられる。

【参考サイト（韓国語）】

高麗大学教授学習開発院 <http://ctl.korea.ac.kr/>

国立ソウル大学教授学習開発センター <http://ctl.snu.ac.kr/>

国立ソウル大学大学生活文化院 <http://snucounsel.snu.ac.kr/>

ソウル女子大学教授・学習研究院 <https://itl.swu.ac.kr/>

梨花女子大学教授学習ポータル <http://itl.ewha.ac.kr/>

（石川 裕之、大塚 雄作、及川 恵）

V-4. 海外研究者の招聘・交流

本年度は、「大学教員教育研修のための相互研修型 FD 拠点形成」および「相互研修型 FD 共同利用拠点」における国際拠点形成に関する取り組みとして 平成 22 年 5 月 17 日に韓国・国立ソウル大学教授学習開発センターからの訪問団を受け入れ、研究会を開催して相互交流を図った。

また、開催時期の関係から本報告では交流の様子を紹介できなかったものの、平成 23 年 2 月 23 日にカナダ・ウェスタンオンタリオ大学 (University of Western Ontario, Canada) のジェームズ・コテ (James Côté) 氏を招聘し、研究会を開催した。

国立ソウル大学教授学習開発センター

(Centre for Teaching and Learning of Seoul National University, Korea)

○京都大学高等教育研究開発推進センター研究会（平成 22 年 5 月 17 日、於：京都大学）





(石川 裕之)

V-5. 国際シンポジウム

「高校／大学から仕事へのトランジションー自己形成の場としての学校教育の到来ー」

1. 概要

2011年2月20日に、カナダの社会心理学者ジェームズ・コテ教授（James Côté、ウェスタンオンタリオ大学）を招聘し、国際シンポジウムを開催する。コテ教授は、学校から仕事へのトランジションに関連して、従来から提示されてきた「人的資本（human capital）」「社会関係資本（social capital）」に、「アイデンティティ資本（identity capital）」を加えてモデルを再構築していることで有名である。国際シンポジウムでは、下記のタイトルで特別講演をおこなってもらう。

特別講演

ジェームズ・コテ（ウェスタンオンタリオ大学教授、カナダ）

「後期近代におけるアイデンティティ資本
——ソフトスキルと教育から仕事へのトランジション」

国際シンポジウムでは、コテ教授の特別講演のほかに、以下のパネルディスカッションも企画している。そこでは、コテ教授のアイデンティティ資本を支えるいくつかの概念——たとえば、「後期近代」「エージェンシー（agency）」「多元的自己」など——について、我が国の学校から仕事へのトランジション、学校教育における自己形成概念の必要性の有無について、関係識者と総合的な議論をおこなう。

パネルディスカッション

乾 彰夫（首都大学東京人文・社会系／東京都立大学人文学部教授）

「後期近代における〈学校から仕事への移行〉とアイデンティティ
——エージェンシー・ストラクチャー・コミュニティ」

浅野 智彦（東京学芸大学教育学部准教授）

「多元化する若者の自己とアイデンティティ資本」

溝上 慎一（京都大学高等教育研究開発推進センター准教授）

「青年期発達としてのアイデンティティと資本としてのアイデンティティ」

2. 付録:案内ポスター



school - to - work Transition

Self Formation

2011年2月20日(日) 13:20~18:20

受付開始 13:00 開会 13:20	参加費無料 ただし 情報交換会は2000円/同時通訳あり	京都大学百周年時計台記念館・ 百周年記念ホール
--------------------------------------	---	----------------------------

挨拶 田中 每実 (京都大学高等教育研究開発推進センター長)
 梶田 徹一 (環太平洋大学学長)
 司会/趣旨説明 溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)

特別講演 13:40~14:55

ジェームズ・コテ (James Côté) (ウェスタンオンタリオ大学教授、カナダ)
 「後期近代におけるアイデンティティ資本 — ソフトスキルと教育から仕事へのトランジション」

パネルディスカッション 15:10-18:20

乾 彰夫 (首都大学東京人文・社会系/東京都立大学人文学部教授)
 「後期近代における〈学校から仕事への移行〉と
 アイデンティティ — エイジェンシー・ストラクチャー・コミュニティ」

浅野 智彦 (東京学芸大学教育学部准教授)
 「多元化する若者の自己とアイデンティティ資本」

溝上 慎一 (京都大学高等教育研究開発推進センター准教授)
 「青年期発達としてのアイデンティティと資本としてのアイデンティティ」

閉会の挨拶 大塚 雄作 (京都大学高等教育研究開発推進センター教授・部門長)
 情報交換会 **18:30~20:00**

主催 京都大学高等教育研究開発推進センター・自己意識研究会
 協賛 関西地区FD連絡協議会



京都大学 Center for the Promotion of Excellence
in Higher Education Research and Development
高等教育研究開発推進センター

参加申し込み方法 締切: 2011年2月4日(金)
 京都大学高等教育研究開発推進センター HP
 (<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/fd/>)より
 参加申し込みフォームをダウンロードして、メール(添付ファイル)にてお申し込みください。

問い合わせ先 京都大学高等教育研究開発推進センター
 tel: 075-753-9369 e-mail: transition@highedu.kyoto-u.ac.jp

自己形成の場としての学校教育の到来



ジェームズ・コテ



乾 彰夫 教育学の立場



浅野 智彦 社会学の立場



溝上 慎一 心理学の立場

国際シンポジウム、
高校／大学から仕事へのトランジション

(溝上 慎一)